

2025年『竹窓二筆』現代語訳

つねにうれフ
人恒病 二執着 一。

人はいつも執着（してしまうこと）を心配する。

然 亦^a不^レ可 二概論 一。

しかしやはり、（すべての執着を）一まとめにして評論するべきではない。

まことニよル ハテ ムヲリ ムノ ヨヲ ツクルニ ト
良 繇^ニ学^レ以^レ好^レ成、好^レ之^レ極名 一^レ着。

（なぜなら）本当に、学びは好むことで成し遂げられ、学びを好むことの究極を執着と呼ぶからです。

げいハ シ ニ れうハ シ ニ ハ スル ニかな
羿 着^レ射、遼 着^レ丸、連 着^レ琴与。

羿は弓を射ることに執着し、遼はお手玉に執着し、連は琴に執着したなあ。

それ スル えきニハ
夫 着^レ弈者、

そもそも、囲碁に執着する者は、

リ へいちやうゑんいう トシテ なスニ ヨ
至 二屏帳垣牖 皆 森然 黑白成 一^レ勢、

仕切りや垣根、窓などすべてに、びっしりと黒と白（の囲碁の石）の形勢が見えるようになり、

スル ニハ リ ノ ことごとク ナルニ
着^レ書者、至 二山中木石 尽 黒 一、

書道に執着する者は、山中の木や石が何でも（墨で書いた書の）黒に見えるようになり、

ブ えがクヲ ヨ ハ ル ハルルニ しゃうたふノニ
学レ画レ馬者、至三馬現ニ於牀榻間一。

馬を描くことを学ぶ者は、寝台の間〔非夢〕に馬の姿が見えるようになる（ほど
専念する）ものです。

それルニテ ノヨ リテ ニ
夫然後以ニ其芸一鳴ニ天下^b一而声ニ後世^c一。

そもそも、こうして初めて、その技芸によって天下に名を轟かせ、
後世に名声を残す（ことができる）のです。

なんびんひとこ
何独於ニ学道一而疑レ之。

どうして仏道を学ぶことにおいてだけ、それを疑う必要があるでしょうか。
いや、ありません。

ノニ ノハ ル ニ
是故参禅人、至ニ於茶不レ知レ茶、飯不レ知レ飯、

そういうわけで、禅を学ぶ人は、お茶を飲んでいてもそのお茶を知覚せず、
食事をしていてもその食事を知覚せず、

キテ ラ クヲ ギシテ ラ ギスルヲ
行不レ知レ行、坐不レ知レ坐、

歩いていても歩いていることを知覚せず、
座っていても座っていることを知覚せず、

ひらキテ はコヲ レ トギスヲ イデテ かはやヲ ルルニ ヨ
発レ篋而忘レ扇、出レ廁而忘^cレ衣。

箱を開けて閉め忘れたり、便所から出て着物を（直し）忘れたりする（ほどに禅に
没入するべきな）のです。

念仏人、至_ニ於開_レ目閉_レ目、而觀在_レ前、

念仏を唱える人は、目を開けても閉じても、眼前に仏を觀想〔「_ニ対象に心を集中し、静かに思いをこらすこと」〕し、

撮_レ心散_レ心、而念恒_一。

心を集中させても散漫になっても、その念は常に（念仏）一つにまでなるのです。

良 繇_ニ情極 志專 、 功深力到_一、

本当に、感情が極まって志が一つに専念して、
修行の功が深まり、力が（十分に）到達して（初めて）、

不_レ覺不_レ知、 忽 入_ニ三昧_一。

知らず知らずのうちに、深く集中した（悟りの）境地に入るのです。

亦猶_ニ鑽_レ燧者、 鑽_レ之不_レ已而発_レ焰、

（これも）また、まるで火打石を擦る者が、火打石を擦るのを止めずに火を起こしたり、

煉_レ鉄者、 煉_レ之不_レ已而成_レ鋼也。

鉄を鍛える者が、鉄を鍛えるのを止めずに鋼を生成したりするようなものです。

概 がいシテおもんばかりナ 慮 ノセンコトヲ 二其着 いついうたうたう 一而悠悠蕩蕩、

一般的に、自分が執着してしまうことを心配して、のんびりゆったりと気ままに（仏道を）学ぼうとするのは、

e
如 ごとク 二水浸 ノひたスガ 一石、 ヲ

水が石を浸すようなもの（で、時間をかけてもほとんど学びは吸収できない）。

窮 ストモねんごふヲ 二歴 なんノえきカコレアラン 年劫 一、何益之有。

非常に長い年月をかけても、いったい何の利益があるだろうか。
いや、まったく利益は無い。

こノニ のハ 是故 f 執滞之着不 レ可 レ有、 のハ 執持之着不 レ可 レ無。 ベカラ ル ベカラ カル

このため、滞って成長もない執着は持つべきではありませんが、
（学びを好んで専念して）持ち続ける執着は必要です必要不可欠です。

※「燧 ひ」の漢字は、実際は火偏ではなく金偏。